

「食」に対しての価値観

北海道北見商業高等学校 3年

佐藤 みのり

私は、小学・中学の時に「日本一の給食」と呼ばれる給食を食べてきた。おいしさはもちろん、栄養面や素材もきちんと考えられた給食を当たり前のように食べることができ、学校に行く楽しさの一つであった。しかし、給食を食べることができない人が数え切れないくらいいることを知ったとき私は何をしたいのかわからなかった。本当の答えなどないのかもしれないけれど、私が学校の授業で日本や世界の食糧問題を調べたときに気づいたことがある。それは「幸せに感謝できること」だった。

ヒトは食べなければ生きてはいけない。しかし、私たちが生活するこの地球上には、永続的な食物の欠乏により、栄養失調に陥っている人々が多く存在する。現在9億人以上の人が飢えに苦しんでいる。世界の7人に1人、途上国に限ると5人に1人が飢餓状態にある計算となる。飢餓の原因としては、これまでも主として自然災害によるもの、環境問題、政治的・民族的対立によるものとされている。しかし、すべての飢餓に共通して根強く影響を及ぼしている原因は「貧困」なのである。先進国と発展途上国の富裕の差が原因とされる飢餓問題が良くなることはあるのだろうか。少なくとも私はこのような人たちの力になりたいと思う。

飢餓に苦しむ地域は南半球に集中し、飢えやそれに関する病気が原因で毎日たくさんの方が命を落としている。世界には全人類が生きるために十分な食糧はあるが、食べることのできない人がこの世にたくさんいる。同じ地球に生まれた者として、食べられない子たちのために何かできることはないか、と考えたときに私はまず「食」についての関心を高めるべきだと思った。「食」に対する意識が低い人が多いのは一つの問題だと思うし、これからの教育などで変えるべき所だと思う。

普段何気なく食べているものにはどのような人が、どれだけ苦労して作ったものなのかを一度でいいから考え直さなければならないし、その人に対する感謝の気持ちを持ち、それを忘れないことが大切だと思う。今では食べ物の量も種類も豊富にあり、食べ物を平気で残したり、残ったものは簡単に捨ててしまう人がほとんどです。これは食べ物を生産してくれる人、調理してくれる人に失礼ではな

いのだろうか。このことを飢餓で苦しむ人が知ったらどうなるのだろうか。怒るのか、悲しむのか、それとも喜ぶのか。絶対に喜ぶことはないだろう。

私たちが住むこの日本を含めた先進国は飢餓で苦しむ人をさらに苦しめている。この現状を解決するには時間がかかると思うが、時間をかけてでも取り組むべき問題であるし、飢餓問題について多くの人々が関心を持ち、行動を起こすことが必要だと思う。学校へ上がることもなく、自分たちが悲惨な状況にあることすら知らないまま、お腹を空かせている子どもが大勢いる中で私たちは毎日三食食べることができ、衣食住に何の不自由もなく生活できる幸せをもっともっと理解していくべきだと思う。この問題に対しての取り組みを日本が一番に行えば日本人の健康と美しい環境、そして子どもたちの未来を守ることにもつながると思う。「いただきます」「ごちそうさま」そして「ありがとう」を言えることに感謝し、世界を救うことで日本も美しくなることを思いながら、私も何か役に立つことを探し、実行していきたいと思います。